がんばってます！消防団

編集●第３分団

暖房器具からの火災や事故に注意しましょう

寒い季節になると、ストーブやファンヒーターなどを使う機会が増えてきます。暖かく快適な冬を過ごすため、暖房器具を利用するときは、次の 10 のことに気をつけましょう。

気を付けたい 10 のこと

1 暖房器具の周りに衣類や紙類など燃えやすいものを置かない

何かの拍子に器具に触れ、発熱・引火することがあります。

2 電源や火をつけたまま持ち歩いたりしない

感震装置などの安全装置がついている器具もありますが、電源（火）がついたまま移動すると、転倒や落下による引火や燃料漏れにつながるおそれがあります。

3 電源や火をつけたまま給油作業をしない

電源（火）がついたまま給油作業を行うと、こぼれた燃料に引火し火災につながるおそれがあります。

4 給油タンクのふたは確実に締める

ふたの締め付けが不十分だと、燃料が漏れる危険があり火災になるおそれがあります。

5 暖房器具の上や近くに洗濯物を干さない

洗濯物を干したときは水分を含んで重く感じていても、乾くと軽くなります。また、固定しているつもりでも、落下して火災になる場合がとても多くなっています。

6 たこ足配線など最大消費電力以上使わない

冬場は暖房器具を含め、多くの電気器具を使うことがあります。コンセントにプラグをいくつも差し込むと容量を超えて、ケーブルが発熱して溶けたりスパークしたりします。

7 コンセントはほこりなどが溜まったまま使用しない

乾燥する時期は、特にトラッキング現象が起こりやすくなります。今一度、テレビやタンスの後ろなど、掃除しにくいところも点検をしましょう。

8 定期的に換気を行う

暖房器具を長時間利用していると空気が汚れたり不完全燃焼が発生し、最悪の場合は死にいたることがあります。

9 灯油以外の燃料を入れない

灯油は無色透明、ガソリンは赤い色がついています。

10 就寝時や外出時は、暖房器具のスイッチを切ること

布団などの近くでは、知らないうちに接触してしまう可能性があります。また、外出中に何らかの原因で発火する可能性もあります。

ALTリレーコラム［第 135 回　南アフリカの誇り、デザートブーツ　by ヴィクサー・ダーク・ジェイコブス］

皆さん、こんにちは。加悦中学校ALTのダークです。

日曜日の朝、ガチャン、ガチャンと隣家の大きく力強い丹後ちりめんを織り上げる織機の動く音で、私は目を覚まします。規則正しく正確に刻まれる織機の音は、とても情緒的なものであり、時には私自身が織機を動かしているような錯覚さえ起こします。丹後ちりめんと与謝野町の発展は深く結びついています。例えば、ちりめん街道では、その誇らしくすばらしい丹後ちりめん発展の道筋について学ぶことができます。

私の母国である南アフリカには、残念なことに丹後ちりめんのような華やかな歴史に匹敵するものはありません。しかし、私たちには「Veldskoen」という愛すべき革靴があります。

「Veldskoen」は砂漠での歩行に適した天然ゴム底の足首丈の靴のことです。その昔、南アフリカにオランダの入植者たちが訪れた際に、従来のレザーソールの靴では砂漠での歩行が困難なことから、新たに作られたのがその起源となります。その後、この靴は第二次世界大戦のアフリカ戦線で戦う兵士の強い味方となり、最近ではおしゃれなファッションアイテムとして多くのブランドで発売されています。現在ではデザートブーツ［デザート＝desert（砂漠）］の愛称で呼ばれています。

現在では多くのブランドから発表されているデザートブーツですが、南アフリカには１８３４年からこの靴を作り続けている工場が「Wupperthal」という町にあります。この町こそ誇るべきデザートブーツの生まれ故郷であり、同じことが丹後ちりめんの元祖である与謝野町にも言えるかと思います。今後も日本の誇る着物素材である丹後ちりめんの生まれ故郷である与謝野町で、丹後ちりめんのすばらしさを味わっていきたいと思います。

デザートブーツは誇るべき南アフリカ文化の一つです

時の贈り物［第 129 回　生誕 200 年　与謝野礼厳（れいごん）の扁額（へんがく）］

与謝野鉄幹（てっかん）の父親である幕末期の僧侶歌人・与謝野礼厳（１８２３～１８９８）が文政６年に与謝野町に生まれてから、今年で２００年となります。

温江の農家・細見家に生まれた礼厳は、加悦の浄福寺で修行し京都西本願寺の掛所・願成寺に入ります。幕末の動乱期、礼厳は本願寺の御用僧として北陸地方の勤王活動に従事しました。明治維新後には社会公益事業に奔走し、療病院や鉱泉場の開設に尽力するなど、民衆の健康維持に心を砕きました。

与謝野町に今も残る直筆の資料を紹介します。「詠茶哥（えいちゃか）」と題されたこの扁額は、長歌の形式で喫茶の効能を軽妙に説いています。人はお酒によって「身を破り家をほろぼす」とする一方で、お茶を朝に夕にたしなむことで「書を読むたすけ」となり、さらに「ものごとにおごりをはぶく」など、お酒の害とお茶の徳を民衆にわかりやすく比較して見せている点が興味深い作品です。

末尾は次のような和歌でしめられています。

宇道山（うじやま）の　木の芽はたしめ　あさ宵に　心きよまり　こころゆたけし

●宇道山の木の芽＝お茶のこと

●たしめ＝嗜め

この扁額は現在、江山文庫で展示中です。

（与謝野町教育委員会）

与謝野礼厳「詠茶哥」